

さがみはら生物多様性 ネットワーク ニュース

第20号
拡大号
発行日
2024年3月



発行 さがみはら生物多様性ネットワーク

さがみはら生物多様性ネットワークは、生物多様性を将来にわたり保全するための取組を実施し、人と自然が共生する社会の実現を目指しています。生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのことです。地球上の生きものは全て直接また間接的に支えあって生きています。

さがみはら生物多様性シンポジウム ～身近な生物多様性を考える～を開催しました！

2024年2月25日(日) 相模原教育会館

会員募集中!!
詳細は最終面へ

第1部 基調講演

「身近に迫る野生動物

～私たちの振る舞いが生物多様性を危機にさらす～

麻布大学獣医学部動物応用科学科 講師 加瀬 ちひろさん



〈生物多様性にせまる4つの危機〉

- 第1の危機 開発や乱獲による種の減少、絶滅・生息・生育地の減少
- 第2の危機 里地里山などの手入れ不足による自然の質の低下
- 第3の危機 外来種などの持ち込みによる生態系のかく乱
- 第4の危機 地球環境の変化による危機



第2の危機 里地里山などの手入れ不足による 自然の質の低下

山際で畑をして生活していた地域に人が住まなくなり、日本各地で、山に戻ってしまっている場所が増えていきます。里山が管理されていた時は、畑の作物が野生動物の被害にあわないように対策していたので、野生動物は人間を怖がり、山の中に留まっていた。しかし、手入れがされなくなった場所は野生動物のエサ場、すみかになってしまいます。もともと人間が畑をしていた場所、今でも近くには住宅街がある場所を野生動物が安全な場所だと思って生活しています。まちと野生動物の距離が非常に近くなる、これが日本の現状です。外来種、在来種に関わらず、私たちは野生動物との付き合い方を考えていかなければなりません。

第3の危機 外来種などの持ち込みによる 生態系のかく乱

私たちにできることは、身近な外来生物について知ることです。私たちが不用意に増やしてしまっているかもしれないということをおみなさんにも考えてほしいと思います。なぜアライグマやハクビシンなどの動物は都市部に進出してきているのでしょうか。その答えは、1年中豊富なエサと安全なねぐらがあって、魅力的だからです。都市部に進出している野生動物は街路樹や庭木の果実、家庭菜園の野菜などをエサにして、神社仏閣や空き地、住宅の屋根裏、空き家などをねぐらにしています。私たちは野生動物に良いエサ場と快適な生活環境を提供して分布を拡大させることの一端を担ってしまっているのです。外来生物対策として、住宅の入口となるような隙間をふさぐ、エサになるものを外に捨てない、果実を収穫する、家庭菜園は柵で囲うなど、不用意に住まわせないような環境づくりに取り組んでほしいと思います。

現在の野生動物は家畜に近づいてきていると感じることがあります。人間の近くで、人間によって提供されたエサやねぐらで生育されているような状態です。野生動物が本来の野生動物らしく生活できること、これも生物多様性保全として取り組んでいくべきことではないでしょうか。そのために私たちができることは、まず、すぐそこに迫る野生動物の存在を意識することです。

「自然の姿≠今のまま」野生動物が野生動物らしくありつづけるために、私たち人間が棲み分けを積極的にしていくことが必要なのです。

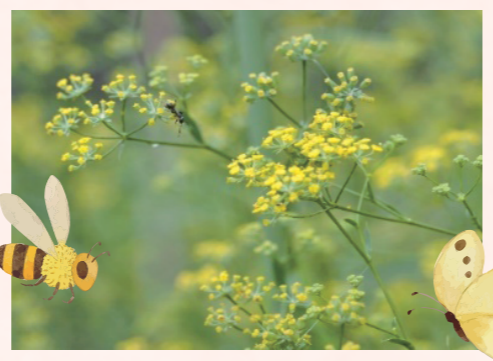


会員活動 紹介

団体会員 相模原柴胡の会



柴胡が原陸橋でサイコ花壇の手入れ



さがみはらサイコ(愛称)の花

相模野の地には古来より「ミシマサイコ」の小さな黄色い花が咲き誇っていました。この地は昔「柴胡が原」と呼ばれていた時代もありました。相模原市民の歌(♪♪♪ 柴胡の原の昔より希望輝く相模原…♪♪♪)や小中学校の校歌にも歌われており、「柴胡が原霊園」や「柴胡が原陸橋」などの施設名や多くの企業・団体名にも使われています。また、いくつかの企業の商品名にもなっています。

しかしながら今現在、多くの相模原市民は絶滅危惧種であるこの薬用植物の存在を知りません。郷土の名花であり、郷土の名産・産業にもなりうるこの薬用植物の存在を市民に知っていただくために、ボランティアグループ「相模原柴胡の会」としての普及活動を、麻溝公園を拠点にして毎月第3木曜日に実施しています。公民館等での講習会や、夏にはイベントとして「サイコフェア」を麻溝公園にて開催しています。

どなたでもお気軽に参加して頂き、絶滅危惧種である「さがみはらサイコ」の普及活動の仲間になってください。

2023年秋 会員交流会を行いました！

麻布大学 いのちの博物館

動物の骨格標本を中心とした貴重な資料が展示されている、いのちの博物館を訪れました。ゾウやキリン、イルカ、ライオン等の骨格標本をもとに、島津館長に解説いただきました。



情報交換会

あざおね社中、NPO法人相模原こもれび、昆虫文化を子供たちに伝える会、相模原柴胡の会、田名塩田の自然を愛する会のみなさんに活動紹介をしていただきました。その後、会員間で意見交換を行いました。

他団体の活動を知ることができて大変有意義でした。

普段近所にあると知っていても訪れることはない博物館や、研究所、大学などを訪問できることはネットワークならではのメリットです。



会員募集中!! 入会随時

さがみはら生物多様性ネットワークに入会して、生物多様性の保全と一緒に取り組みませんか。ネットワークの趣旨に賛同する個人・団体・事業者で活動に積極的に参加していただける方であれば、どなたでも入会できます。

年会費…1口1,000円
個人・団体会員 / 1口以上
事業者会員 / 2口以上

発行者：さがみはら生物多様性ネットワーク事務局
(相模原市水みどり環境課内)
住所：相模原市中央区中央2-11-15
電話：042-769-8242
Eメール：midori@city.sagamihara.kanagawa.jp



防災・減災と生物多様性

一般社団法人コモンフォレストジャパン理事 坂田昌子

2024年元日、能登半島を襲った巨大地震とその被害は、多くの人々を震撼させました。1000年に一度といわれた東日本大震災からまだ13年、阪神・淡路大震災からは29年、またもや大地震に見舞われる事態に、災害に対する危機感はいくらも以上にならなっています。

有史より日本列島は地震、津波、火山の噴火、台風、洪水、土砂災害など多種多様な災害に何度も襲われるがゆえに、防災・減災に関する多くの伝統的な知恵が育まれてきました。その多くは生態系を健全に保ち、調整機能を引き出すことにより、自然災害のリスクを軽減させることが中心でした。しかし、近代以降、人間による開発や汚染、気候変動の影響



といった環境破壊は、生態系が本来持っている防災・減災能力を損ない、災害の激甚化をもたらしている事態が、現在、大きな問題となっています。

さがみはら生物多様性シンポジウム～身近な生物多様性を考える～

第II部 活動事例発表

光明学園相模原高等学校 理科研究部

「STOP！クリハラリス ～特定外来生物の分布を抑えるために～」

神奈川県内で分布を拡大している特定外来生物のクリハラリスについて、分布調査と食性の調査に取り組んでいます。

分布調査では、録音したクリハラリスの鳴き声を再生することで付近にいるクリハラリスをおびき寄せて、生息を確認しています。また、食性調査では、葉山町で有害獣駆除された個体を譲り受けて、胃の内容物を実体顕微鏡で観察し、内容物を確認するほか、消化が進んでいるものについてはDNA分析をしています。クリハラリスが高密度で分布している地域において、昆虫類が多く捕食されている可能性があるという情報があったため、昆虫にしほり調査を行いました。



相模原弥栄高等学校 サイエンス部

「ドクターフィッシュの知られざる生態 ～魚がお医者さん!?～」

ドクターフィッシュは、ヒトの皮膚の角質を食べる魚として知られていますが、どうやってヒトの皮膚を認識し、反応しているかはわかっていません。「光」、「振動」、「温度」、「分泌されるもの」の4つの要素が採餌行動を引き起こすと仮定して、角質の成分に反応しているのか、仮定した要素に反応しているのかを明らかにすることを目的に実験を行いました。



「植物のパワーでヒルからみんなを守ろう！」

ヤマビルは、私の住む地域にたくさん生息していて、地域の方や家族が被害にあっていました。既製の忌避剤・殺虫剤の成分について調べたところ、DEET という成分が多く含まれていることがわかりました。植物を使って、身近で簡単な、環境にもヒトにも害がない、DEETのような効果がある忌避剤をつくることを目的に実験を行いました。

2000年以降、生物多様性条約締約国会議では、Eco-DRR (Ecosystem-based Disaster Risk Reduction) と呼ばれる「生態系を活用した防災・減災」の重要性が何度も強調されてきました。たとえば、森林の樹木の根は土壌の固定に大きな役割を果たしており、土壌の浸食や崩壊を防ぐこと、また異なる高さの樹木で構成される健全な森林では、高木の葉が雨を細かなしぶきに変え、そのしぶきは低木の葉にあたることによってさらに細かくなり、灌木(かんぼく)、草と次々と雨水は細かくなり続け、地表に落ちるときには雨の勢いは非常に小さく抑えられ表土の流出を防ぐこと、さらに樹木は雨水を吸水し、地下水や伏流水といった形で土中に貯留し、洪水の被害を軽減することなど、森林生態系は自然災害の軽減に大きく寄与しているのです。

しかし、近代以降は、強力なコンクリート擁壁や巨大防潮堤、治水ダムや砂防ダムなどによって自然の力を抑え込む近代土木工法が主流となっています。それが最も端的に表れたのは河川事業です。洪水や土砂災害を引き起こす水は、一刻も早く海まで流してしまえば安全という発想により、河川の暗渠化や護岸が行われ、水路という水路はU字溝が施され、雨水を早く流すことが目指されています。その結果、山はどんどん保水力をなくし、乾燥し続け、ちょっとした台風で樹木は倒れ土砂は流出、大雨の時には、雨水は森林に浸透せず、コンクリート護岸の河川をすさまじい勢いで流れるようになってしまいました。いまや、生物や生態系の保護・回復を通じて、自然災害リスクを軽減しようとするEco-DRRの行動計画の実施は待たなしの状況になっています。

どれほどの人工的な巨大構築物も自然に打ち勝つことはできないことを前提とし、森林の保全、洪水を一時的に受け止めてくれる湿地の回復、河川行政の見直しが始まりつつあります。2019年の台風第19号で堤防決壊が相次いだ那珂川や久慈川の洪水対策として、国交省関東地方整備局は、伝統的な治水方法「霞堤(かすみてい)」を活用しようとしています。霞堤の起源は、戦国時代の武将武田信玄の考案とされており、かつては各地の河川で取り入れられていました。堤防をあえて途切れさせ、増水した水を遊水地に誘導し、下流域の流量を減らす方法です。

2022年8月、福井県南越前町を襲った記録的豪雨は、鹿藪川(かひるがわ)のコンクリート護岸を破壊し氾濫、大きな被害をもたらしました。しかし、同じ南越前町の赤谷川(通称アカタン)には、100年前に築造された「アカタン砂防堰堤群(さぼうえんていぐん)」によって全く氾濫し

ませんでした。明治期に築造され、現在は国の登録有形文化財になっている石積み堰堤7基、土堰堤2基の「アカタン砂防堰堤群」は現役で活躍中です。この石積み砂防堰堤は、よくあるコンクリート砂防堰堤とは異なり、川の流れを完全に塞ぎません。自然の岩盤の強度を巧みに利用し、左右いずれかの山の斜面側には水を通すように石が積み、洪水の際には山に当てることで水の力をやわらげます。また石と石の間隙は土や小石などを詰めず、水量が増えても水が通りやすい構造になっており、水に逆らわずコントロールしているのです。



アカタン砂防堰堤群

また、世界農業遺産に登録された徳島県にし阿波地域(美馬市・三好市・つるぎ町・東みよし町)は、剣山系の急峻な斜度40度にもなる傾斜地で農耕が行われ独自の風景を作り出していますが、細かく刻んだカヤを活用して土砂に混ぜ込むことで流出を防いだり、要所にある社叢林や巨樹を大切に残し、根を張らせることで土砂崩れを防いでいます。

このような自然災害と共生しながら生きていく知恵を日常生活に取り入れてきた先人から学びつつ、生物多様性の保全がわたしたち人間の命をも守るという認識こそが、Eco-DRRの最も重要な視点にほかなりません。



にし阿波地域のカヤのすき込みによる土砂流出防止

